

開講年度	令和8年度	開講課程	博士課程
授業名	死因究明学特論		
開講キャンパス	紀三井寺・伏虎	教室	基礎教育棟3階講義室3 中講義室303
科目区分	専門科目	配当年次	1年次
必修・選択の別	選択	単位	1単位
対象学生	—	使用言語	日本語
キーワード	死因究明、人口統計、死因別死亡率、児童虐待、代謝、中毒・解毒、天然毒、薬毒物、分析方法		
担当教員 (下線：科目責任者)	医	教授 上田 豊、教授 近藤稔和、准教授 田村 彰	
	薬	教授 長野一也、講師 山下琢矢、助教 堤峻太郎、教授 村井健一、教授 田村理、准教授 田中千晶、教授 太田 茂、教授 松原和夫	
授業の概要	死因論、死後画像診断、児童虐待、毒と解毒など医学・薬学両分野から損傷の成傷機転や死因究明に係る知識・考察法などを学び、法医学を中心とした最新の知見を修得する。		
到達目標	<input type="checkbox"/> 死因究明の社会的意義を理解する。 <input type="checkbox"/> 人口統計の概要と、死因別死亡率の推移等について理解する。 <input type="checkbox"/> 児童虐待の成因、現状の問題点を理解する。 <input type="checkbox"/> 医薬品、麻薬、覚せい剤などを摂取した際の代謝（解毒機構）について説明できる。 <input type="checkbox"/> 毒性学・安全科学の考え方を理解し、中毒や解毒について説明できる。 <input type="checkbox"/> 天然有機化合物に起因する死亡について、原因となる化合物の構造や作用メカニズムについて修得し、概説できる。 <input type="checkbox"/> 化学物質は生体との関わりによって「薬」となる一方で「毒」となることを理解するとともに、一般的な分析方法を修得する。		
授業計画	1. 毒と解毒（長野一也／山下琢矢／堤峻太郎／1回）【11/18 6限】 薬学的視点での毒性学・安全科学の考え方と中毒・解毒について概説する。 2. 死因別死亡率の年次推移と最近の動向（上田 豊／1回）【11/25 6限】 死因別死亡率の年次推移と最近の動向について講義する。 3. 天然毒（村井健一／田村 理／田中千晶／1回）【11/25 7限】 致死性の天然毒とその作用メカニズムについて修得する。		

授業計画	<p>4. 日本と諸外国の死因究明の最近の動向（近藤稔和／1回）【12/2 6限】</p> <p>5. 様々な損傷の成傷機転の解析と死因との関係の考察（近藤稔和／1回）【12/2 7限】 様々な損傷の成傷機転や損傷と死因との関係、死因に寄与する外因と内因について講義する。</p> <p>6. 代謝（太田 茂／1回）【12/3 6限】 医薬品、麻薬、覚せい剤などを摂取した際の代謝（解毒機構）について講義する。</p> <p>7. 生体と毒の関わり、分析方法について（松原和夫／1回）【12/9 6限】 生体と毒の関わり、分析方法について講義を行う。</p> <p>8. 児童虐待における最近の動向（田村 彰／1回）【12/9 7限】 近年、児童虐待が増加する社会背景を理解し、実例から発見方法、対処方法、防止対策についての検証を行う。</p>
授業の方法・形態	講義を中心とする。 遠隔会議システムを利用した同時配信を行う。
使用するメディア	パワーポイント等によるスライド資料を使用する。
成績評価の基準	授業への取組20%（発問に対する応答や発言内容、主体的・積極的な受講姿勢）及びレポート80%によりS（90点以上）、A（80～89点）、B（70～79点）、C（60～69点）、D（59点以下）の5段階で評価し、C以上を合格とする。
授業時間外の学修に関する指示	教科書・参考書が指定されている場合は予習を行うとともに、各回終了後には復習を行うこと。そのほか、各担当教員の指示に従うこと。
オフィスアワー（学生からの質問事項等への対応）	担当教員により異なるため、希望する場合はメール又は電話により予約すること。
教科書・参考書	<p>【教科書】 特に指定しないが、担当者が作成した資料を配布する。</p> <p>【参考書】 授業計画2 「国民衛生の動向」（厚生労働統計協会）</p> <p>授業計画4・5 「死体検案ハンドブック」 著者：近藤稔和ら 出版社：金芳堂 「検死ハンドブック」 著者：高津光洋 出版社：南山堂 「標準法医学」 著者：池田典昭 出版社：医学書院</p> <p>授業計画7 「薬毒物試験法注解2017」 編集：日本薬学会 出版社：東京化学同人</p>